開明
小説
春雨文庫
初編 上

松村春輔編輯

開明小説

春雨文庫

前編二冊

櫻雨園社中蔵版

A416
1
48-7519

春雨文庫之序

抑も這書を春雨文庫と題名けしハ松葉巴の唱歌を礎とし或ハ故人の小説物を飜案做し一部となしゝぞ本文の眼目ハ既往十有餘年開鎖和攘の説発り海内鼎沸の時に當り丹心報國の壮夫の義を泰山の重きに較べ命を鴻毛の

軽きより傲べ美名を青史に残すものもあり
奸智を逞ふし一時の榮花を顧みなく
汚名を千歳に傳る佞臣あり或は貞操に
為に身を薄命に終り或は孝順の不幸に
して身を苦界に沈むる未通女ありし
當時見聞為る所有為轉變の憂世なる
なぞや恁而我師春輔大人を其人々の真說

ある事迹を折にふれて筆記せられし物
今むさ櫻雨園窓下の文函に蔵めありて這回
梓に上し更に辞を飾ぎして春雨文庫と
号けられてより莫遮江湖に近頃流布せる
史畧せりの物牛に汗し棟に充まで茲に
復夫の種なくしぞ架空の説を著さるぞして
専ら婦幼に讀易く解譯まるを旨とし

縱まんべ大人君子ハ東ゆのれ西もまゝ婦女幼稚
達の御愛顧を只管願ひ稟ふまをんと序
文ヲ擱て述る者まそ

于時明治九年冬一月
南枝の楳も稍々蕾を
破る頃

細雨園春驪

鶴田容書

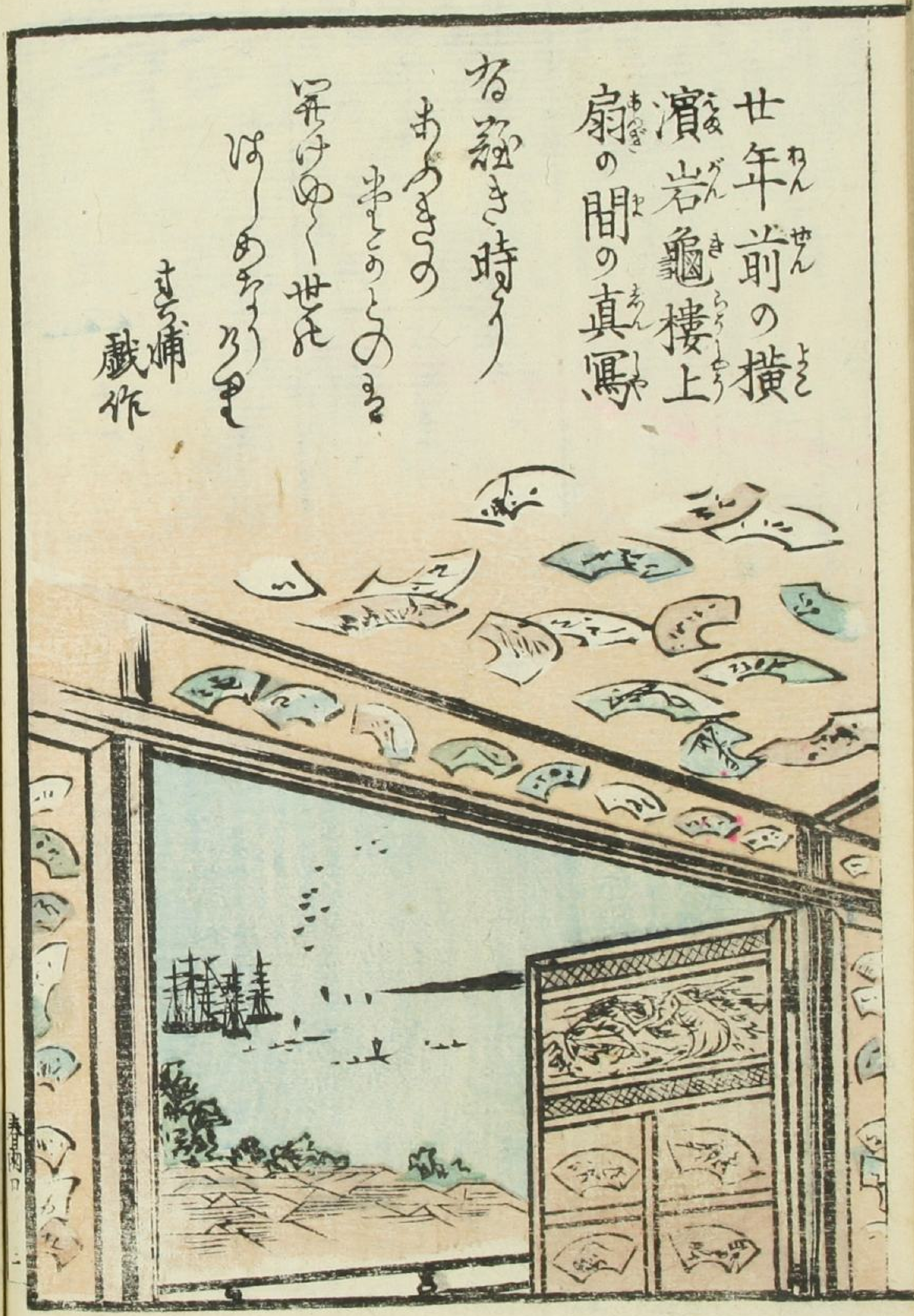
近藤芳樹翁が詠と
あひし鴨東四時の今
様うたの中春夏の部

柳の糸と花の袖ゆかし色をか
うさねの裏を結ぶかへり
来る春のかゝ毛の空うれ
聲

汀のさゞ波き腰うけてさつま
鴉さんせ虫飛と来む蝶が蝶う
また米からとを底つたのゑん毛る
比さんあろし

喜遊が
幼のうち
父正菴が
むかしのさま

嶋田ヶ妾宅木屋街の納涼



春雨文庫上の巻

東京 松村春輔著述
大久保春驪校訂

第一回

九尺二間の一棟に按摩針立陰陽師糊賣り婆ア洗濯屋嚊アの腕で宿六を喰わせる女髪結あれば娘の臀の光りを仰いで僥倖を得る老孃あり或れ硯女日償金貸と種々百般の産業に浮世を渡る

裏借屋その路次口の井戸端に長屋中のあらせ
そを捜して世間へ觸廻る鉄棒引の隊長と言れ
きる山の神達が三人寄まつ姦といふ字に齊しく
咄し声「ヲヤお引さん洗濯かへ。「アイおちやのきん聞て
お呉ヨ昨夜も内の野呂間野良が何處で飲だか
大酔になつてあつちのけに泥濘へ轉げ込でも爲たろ
泥だらけになつて歸つて来たから大平樂を言
つて居るから面が憎らしく洗つて遣る氣もな

かつてけまでども打棄る譯にもいかねへから振り
出して置うと思つたら泥だらけで宜が襟も
肩も油垢で塗たやうに汚れて居るのんだから
熟灰汁でもシヤボンでも急に落やア爲ないはな。「夫れ
でもお前の處の外さんなんざア呑むばかりだから
宜いけれど私の所のは一日稼ぐと二日は遊ぶし
いるのだから困らアな今朝も横町の湯屋の二階に
ふんぞりかへつて居るのを私が引張つて来て

無理に仕事に追出しなさるアチ〆「ホンニそりやア
さうとお前の隣じやア大夫工面が宜くなつたと
見へて老嬢まで衣裳が出来たノウ。「アイサ那方の
娘も此間まで青ツ鼻汁をたらして居たが此頃
じやア美しく為つて顔を真白に塗立てゝおつうすまし
あるき歩くが子何でも時々旦那らしい人が来る様子
だがよ是迄と言ふものは鰯ツ子を一ツ買つた事もな
かつたのが昨日も肴屋を呼込んで鰹の刺身を自

慢らしく作らせて居るから面が憎いじやアないか
「夫は引替て可憐さうなのは角の内だヨ那人は皆
川町の表通りに居た太田正庵といふ名札まで
出した些とア近所で流行たものだがいくらお醫
者でも自分の病氣は詮方がないものだと見へて
三年越しの永煩ひだし表の住宅も持ち切れずに
とうとう裏へ引込んだが又此頃じやアお内義さん
迄が病氣づいて枕を並べて寝て居るさうだが

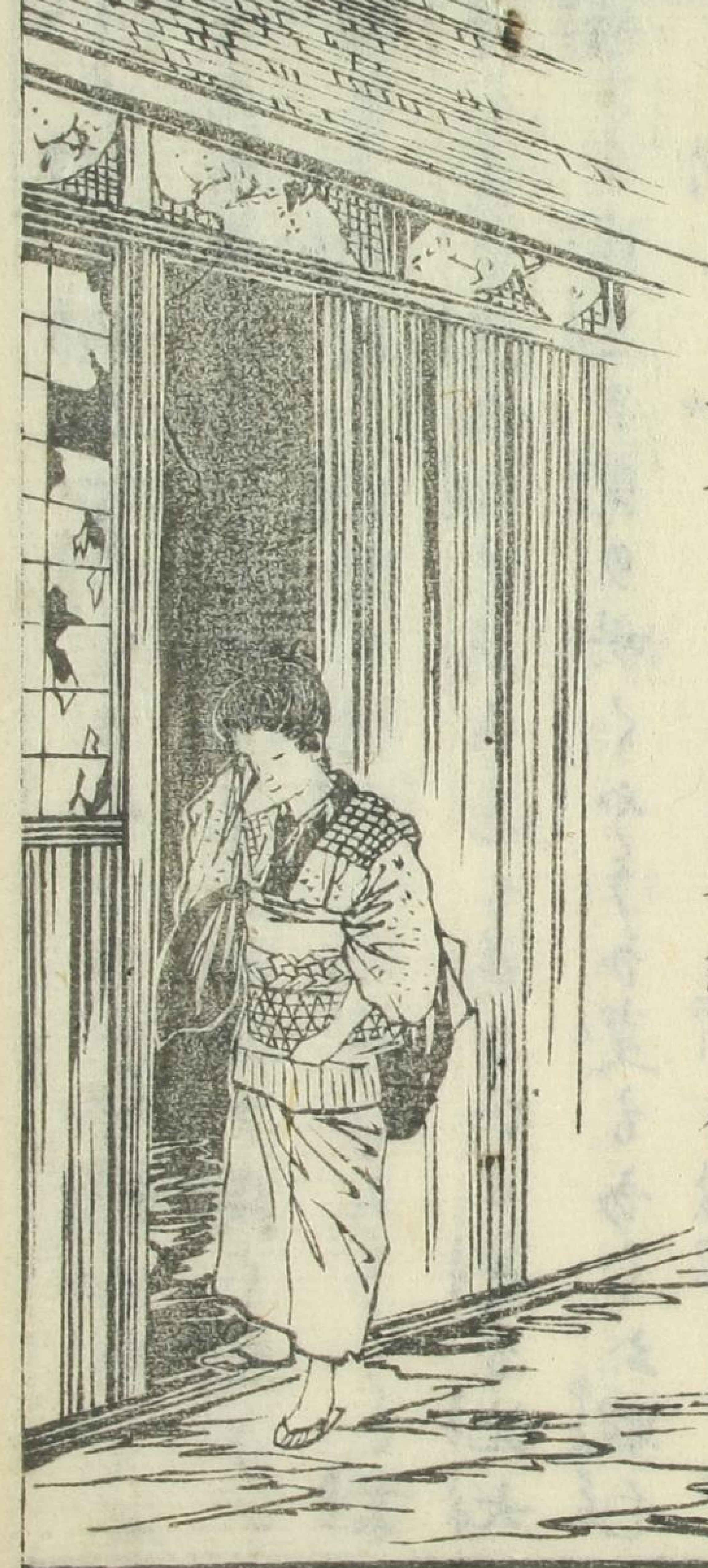
難困るじやアりう子エヽ「全躰あの正庵さんといふ人が
お心よしの結構人だのにお内義さんが引摺て来て
居るのだから意氣地ハなし所へ煩つてからへ去年の
大地震で表の住居が潰れたのだものを堪らない
ハ子▲「ヲヤ那住居ハ地震で潰れたつけ子エ●「潰れた
どころか躯も正庵さんが梁の間へ挟まれたのを
大騒ぎをやつて出したさわぎなのさ▲「なる程夫
から裏へ引込んだのだ子●「何だか知らないが那方の

内でハ一番可憐さうなのハチイさんと言ふ娘ツ子
だヨ歳ハ漸々九ツか十ウだらうのに両親にお粥を
喫させる事も出来ないと言つて降ツても照ツても
枝豆や附木を賣つて歩行て住居へ帰ると親の
看病をする様子だが今時の子供にハ珍らしいヨ
×「ホンニ子エ其うへ那児ハ目鼻立が美しいし最う四ツ
五ツも年を取つて居ると妾に出るか旦那を
取るか又ハ芳原へ身を賣るか親の困らないく

あいやうな仕法は何拐ら立つてしまつたが何を言ふ
にも那筆では詮方がないと言ひながら覚へぞ後
ろを見返りてヽメ「ヲヤしく嘆をこぼれぬ影ではなく何
時の間にか此娘が後ろに立つて居さよ放心人変は
言つまゝない子だの「千イさん宜く毎日商ひにお出だネ
附木が売れるかヘ千「あいさんは売れませんヨ▲「そして
お爺さんやお母さんは些とア快いかへ千「ハイ何所も快く
ないので困りますヨト少さな袖を顔へ当てゝ泣々

我が家へ帰り行くを彼三人は見送りてヽメ「真実に
那児の顔を見ると胸が一ぱいになるネヘ▲「私しやア
あんまり見かねたから昨日も雪花菜の煎つたのを
持て往つてやつたらヨメ「ヲヤ善くおやりだネヘ私も
お午飯にお芋のお汁を拵へるからやらうや。ホンニ
お昼と言へばお米を磨に来てゐながら喋つて居
たよト言ふ時石町の正午の鐘ゴヲンヽヽ引
正「婆アどん千イ児は未だ帰らないか妻「アイ何ぞ用が

ありませんへ正「咳をするので咽が干渇てならないから病人を使ふのハ氣の毒だが手が届かないから其處の土瓶を引寄せて呉ないか妻「アイヨ少し待つてお呉よト言ひながら苦しさうに布團の上から這出して火鉢に掛てある古土瓶の湯を良人の枕元にある茶碗に注でやれバ正庵ハ重さうな枕を離れて起返り湯を呑込で息をつき正「ホンニ思へバ此身のやうな因果な者ハ又とあるまい長の



病氣の其うへに居宅も家財も地震で毀されて頼りと思ふお妹も遊が頬ひ付て呉ないから困窮もしたれバ詮方もないが年端も行ない

図

千イ兒に明暮苦労をさせるのが可憐なくて
こんな憂い目を見やうより此身が疾く死なば
けれど死だら那兒の行末が何様なるらうと案
事られて思ひ切て死ぬにも為れぬが迚も此大
病では煎豆に花の咲くやうな事もなく只暇乞
ぞと念つて居るうちかねしれ石に喰付ても快
なつて何卒那兒を人並に育あげて呉なせへ是
がらうりが頼みぞト枕に顔をおし當て涙ぐむと

倶に咳入まつば側に寝て居る女房が起て介抱為
るいかなる其身も重き病中ときつまる力さへ
泣より外の事ぞなく余所の哀れを毫ほども知ら
ず髪頭の岩争婆アが門おし明けてどかつと這入り
なふ「何だエ面白くもねへ又二個で愁歎かエおんぎ
でもねへ廃止なせへな僕人の悲しいのハ三年
さつきから我慢をしてるから泣なくば泣が宜が此身ア
夫を聞ちやア居られやせんヨ先月貸る一歩の

金を一償で返すと言ひなさるから貸て進ぜやう
廿日も立の間に娘ッ子が附木を賣つゝ錢で漸々
三百這入こ位の事じやア利足になる追付ねへ爰の
内へ壹分と言ッちやア出しなくいけれどもお前
達が鋪て居る布團を抵當に貸たのだから今日
金が出来ないと言やア布團を引剥で持てゆる
からまア然う思つて貰ひませう ト言ふに驚く
正庵が苦しき胸を摩りながら正「なる程お前の
言ひなさる所は至極道理なれど此ざまをお見掛
通り夫婦ながら枕を並べて寐て居ますせいよく「コレサ
お前方の病氣ハ今始まつた事じやアねへのに
夫が愈る迄べん〳〵と待て居ちやア此身の腮が
干あがらア 四の五のと面倒ざ約束通り此の布
團を持て往くから退なせへ ト遠慮會釈もあらく
くも婆ア夫婦が敷たる古布團を手込に取らん
とする所へ此家の娘が立帰り夫と見るより狗

さうしてチ「アレサお婆さん其布團があつてもお爺
さんやお母さんが晩から凍へて死なれたらト
其手にすがりて禁むましたがよ「ヲヤ娘ッ子帰つたのか
お前が丈程欲くなつた布團を並て往く質に貸さ
金を返さねへうちチ「ハイお金と言つちやア在ませんが
附木を賣つてお米を二合買つて残りが五十だ
かりありますから今日の所は是で堪忍して下
さいましよ「アイ〳〵此子はあんまりな事を言ふじやア

あいつが大枚壹分といふ金を取に来て五十それ
ぞの端多錢が持て歸るものかイケ馬鹿々々
しい何でも今日は勘弁がならねへト又かの布
團をまくりに掛るをチ「アレサア待つてお呉なさい
今井戸端で余所の婆さん達が咄して居るのを
私が聞ば四ツ五ツ年を取つて居ると吉原へ身
を賣てもお爺さん達の困らないやうになると
言ひましたから今私の身を賣てお前のお借を返

しさうんでお爺さん達にも少しハお金の進ら
れるやうな事があるか私の體ハ何様なつても
宜から然う為たい物ならお婆さん何格為せう
ハありませんかへよ「ヲヤお前ハ思ひの外怜悧な
兒だノウ當ひ近所に心易い判人が居るから直に
聞て見て進せうト言ながら立に掛るを正庵が
慌て声をかけ「アモシお欲さん少し待つて下さいまし
奈何に貧苦に逼つたと言つて可憐なる此兒が

何格して賣られませうものかヨサ野夫な事を言な
さんな素人の了簡でハ苦界と言ふからさんな
ものゝ怨い物の中のに思ふが大間違ひサ私も此
前の御改革の出る時分近ハ吉原ハ言に及ばず深川七場所
根津谷中千住板橋の宿場までもずつと襟に孀の
出来る程泥水の商賣を為て見たしが結句氣
楽で面白いものサ此兒なんぞハ今賣つたらと
言ながら直にお客に出せるのだもの娘の中のに可

愛らしく藝事ハ勝手な物が習ハせるしたんな
敝衣を着て三度の飯もろく〳〵喰ハずに居るから
見るといふくらい仕合だが知りもやア為ないヨ併お前
が不承知なら無理に勧めもせぬお責とん言ハないが
暫りの壹分の形に此布團を持つて往くから彼
是ハ如何なるの子正「何程も病人が布團を取られては
くれよく「ソレ見なせへな夫がから此兒の言ふ通りにま
るが宜ハ子干「お爺さんもお母さんも私が今から居なく

なつたらお薬を煎じたりお粥を拵へたりお脊
中を撫たりする者がないのがお困りだらうと思
ふと夫が寔に悲しいけれど此お婆さんのお借を
進なハそれ置きがたまハ何卒私の體を賣つて
少しでもお金が取れたら夫で美味なのを喫て
些とも疾く病悩を快くして私の所へ逢に来て
お呉なさいヨ夫なら私が楽しみにしてから卜歳に
似合ぬ健氣な辭泣かぬ振して目の中に涙一ぱい

合ことを見る双親ハ腸も断離る程の哀しさに
我が兒の手を取り抱き寄せ歎きの數々口説き
立声あるれして泣沈む目も當られぬ形状ハ最
憐をもぞ見へにける

第二回

尓程に正庵ハ女兒が節ある志操の不便さやる
うこなしねども己を得ざるの手詰に至り遂に
件のお欲を頼みて新吉原町二丁目なる甲子屋

といふ妓樓へ質入の約定なして僅かなりの
身の代なく一個の女兒を遣ハしぬる血の出るや
うな金を得て不義理なりし借を償ひ残る金
なく姑くハ夫婦が露命を繫ぎしが貧と病に逼
られて正庵のそろ其妻きへ世になき人となりし
うが今ハ女兒を誰あつて受返す者なしぎる故
終に甲子屋に於て遊女並に抱へ置き此兒が十
五になりし春頭て其名を子日と喚びて初めて

客に出せしに容貌よきのみならず親に孝ある者なりとて主人もなする善く仕へ朋輩中にも睦まじく我が召仕ふ兎にも隙あるときハ讀書など自から教へ与きしにが此侭なりバ甲子屋の大黒柱となるべしと心に其處に何か訳合ありけん横濱の妓院岩亀樓へ住替に出る支に至りおほ流れの勤めせん子日ハこれを厭ふにあらねと外國の客に出るハ奈何にも忍びがたけれバとて

此住替を辞しかど十二横濱へ来さへらと言つゝ洋客さんに出さぞやうな支ハ此身がきせねへト岩亀の主人が口奇麗に固く盟つゝ言ひしうバ夫ならバとて

後

相從整ひ既に横濱へ至るに及びて予日は喜遊
と名を更めし他の娼妓に競ぶまじき客の為て
あし慇懃なるに義氣ある躰に見ゆるゆゑ岩亀の
一枚看板と言はるる程の身となりて客の絶間も
なき中に横濱居留の亜米利加人まで名を「イルー」と
言へる者喜遊が色香に深く惑ひて許多の金を
蒔散し喜遊の客になりたしと言ふゆゑ岩亀の
主人も洋人の客は取らせませぬと約せしなど弁

外が欲得づくなれば是等の訳を喜遊に咄して
お為ごかしに勧めしかど更に受引く氣色も見
へざれば然りとてこんな福の神が舞込んだのを取
遁しては奈何にも惜しいことと思へど姑く病氣と
言なして客を釣付け置くわざに亜米利
加人は腹を立て「私莫大金出しました貴公亀遊
買はせる條約しくありません私虚言いひません
貴公虚言諾ませんト真赤になりて掛合ひまるで主

人は甚だ當惑せしうが客を程よく宥め置きて
喜遊を窃かに呼近づけ頻りに天窓を掻きながら
主「此身アせんど事をして今となりちや後へも
先へも往く事は出来ぬ実にお前にも顔の合されぬ
ない訳だが何卒此身を助けると思つて此お後
に乗つて呉れない喜「ヲヤまア旦那何がそんなに
氣の揉る事があるんでありますえ主「然ればサ此
間もおぬしに咄した亜米利加の客人だが折角

とお前の事を那通り言つて居るのを異人さんに
出る事は喜遊が否だとまでしよまあと其處を商
賣の悲しさにそんな色氣のない事は言ひもならぬあの
から病氣と言つて日を延すうちにむかア先も退屈
して他の女郎衆でも宜いと言なさろうと思つ
たら余程深くおぬしの事を思ひ込で居ると見へて
是非とも喜遊を出せといふ條約ぐして有ませば
此身を客にきんしして呉ると直に二百両の金を

遣る若しも條約を違へる時ハ夫までの揚金を取
らねやアならねへと今夜ニ逼つて来た皆の具合
此身も此廓で外見の商賣を爲て居て外國人ニ
揚金を取られると言つちやア實ニ名義ニ拘る
訳だからから爰の所を汲分て否でもならうが出て
呉めへからおぬしが銘と承知をしたが逆上きつて
居る客人だからから金を幾許でも取り次第おぬしの
爲ニもなる訳だからから爰等で一番氣を替て承知

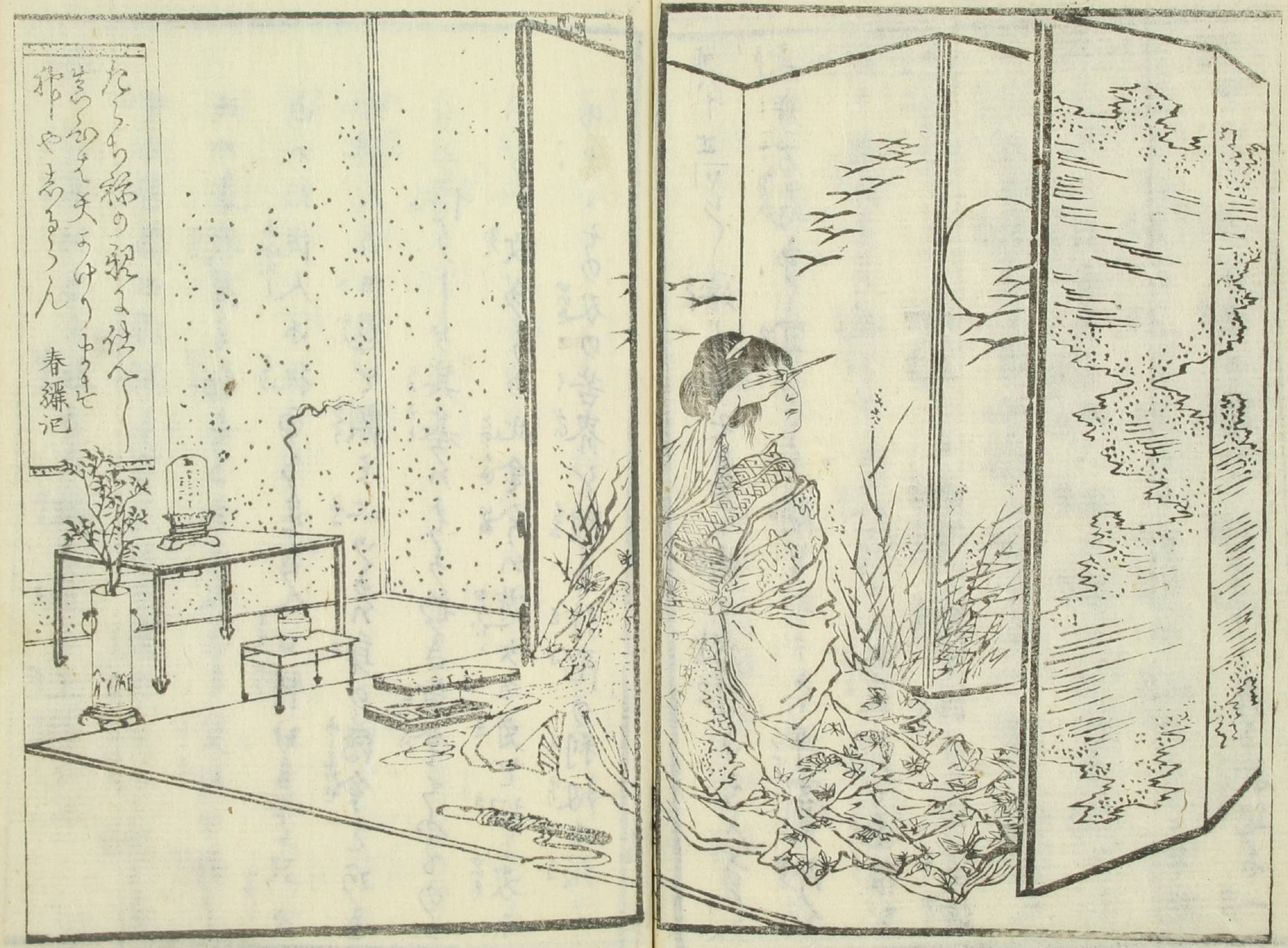
を爲ちやア呉ないか外國人だと言つて目の色
と髪の毛こそ違つて居るやうなものゝ同じ世界
の人間だもの躬を任せると言つて然のみ恥
でもなりやア爲ねへヨ今此土地じやア娼妓ハ勿論
素人の婦女子がラシヤメンになつて立派ニ親兄弟を
養つて居るものがいくらも在らアな名を取らう
より得の世の中だものを今時おぬしのやうな
野暮固い事を言ふものがあるものかね喜「そりや

旦那さんのお言なさる事でハありませんけれどもな
是が否さに賓人住替の事を断ツたんでハありませんヨ
私きやアどんな無理を言ふ客人でも憂が勤め
ことゝ思ふからどうしても悪い顔を見せて悔しい事ハ
ありませんが異人に肌を汚されてと言ッちやア
親の恥になる事でありませうから解らない女だと
お腹も立ませうけれども是ばかりハ私の言状を
立てゝお呉なさいまし卜言ひ放されて困り果しが主人ハ

猶も押返しく主「なる程おぬしの氣性じやア然う
思ふのハ無理卜じやアあるまいが此身も男が一旦然うと
言つた口ハどんな事でも変らせねへと義理ゆゑも
言ハなきやアならねへ所を面の皮を厚くして主
人が抱への女郎を此通り手を下げて頼むのハ
よくよく苦しい訳があるから約束事ことながら
めへの事ハ言ハあるまいが今夜一晩那客の機嫌
を取つて呉めへかとおぬしが否だと言やア

今日から店へ戸を〆ねへじやアすまねへ事になる
のだから義理を知る奉公人は無慈悲な主人だと
腹も立うが勤といふ一字に負て何卒此身の顔
を立て呉めへかト拝むばかりに頼まれて喜遊は
姑く返事もなかりしが俯向て居たりしが喜「私の
言状を立やうと思へばお店が立行まいと聞ちやア
夫でも構はないとは言れませんから旦那のお
顔の立やうにいたします主「夫じやア今夜那客人に出て呉るか

喜「ハイ主「ヤレ嬉しや夫まで胸が落付たそんなら
急度一刻も違なく宜しくト期をおくりて洋客の弁人
断りて報告しかバ彼「イルース」は歓びて此夜は別て金銀を
萌散らして稍えしく酒宴に時を移せしかども喜遊
が其座に出ざれバ洋客は頻りに焦燥て何ゆゑ
出ぬと促しゆゑ主人は胸の安からねバ自から
喜遊の部屋に至り見れバ無慙や短刀にて早晩
咽をさし貫き朱に染て仆れ死したる枕辺に一


春繹記

通の遺書なるに驚き〳〵披き見る文面にハ
世に苦界に浮沈をするもの幾千万人と限りも
なけれど我身も勤する身なれバ父母の許し
ならぬ徒人に肌ゆるすさへ口惜けれど只々
旧主人の旧恩を顧ひ二ツなき身の露命をつなぎ
とめ侍りしが其基ハもろき黄金にあるもの
なるが故なれバ此金今ハ遊女の身を切る刃に
かはりて其刃の苦界を離れ弥陀の利剣に成し

来らせ給ひて主人に辞して早々双親へ仕へなされ
らせ給へバ黄金の光りとても何ならせんなれど
しと思ふ欲の夢覚よかしと誠の道を急ぎ給ふ
無念の歯がみを顕ハせし我が死骸を今宵の
容にお見せ下さるゝ斯る卑しき浮き女さへ日の
本の志ハ侍くぞと知らしめなさるべく候
露をうけたる倭の女郎花
嫋るは老りうに袖はぬらさし

此喜遊が傳ハ其頃大ひに噂して専ら義妓と美称せり同時に亞國の公使某なる者吉原の娼妓櫻木と言へるに眷恋し迎へて妾となさんとせしを櫻木辞して應ぜざる故亞人望みを失ひしが權勢をもて手に入れんと窃かに閣老某の侍従に談じけるが侍従ハ輒く諾ひて頓て櫻木を抱置く妓院の主を召寄せて速かに亞人の望みに應ぜべしと旨命せしかど櫻木固辞して之を聴かざりき一首の歌を詠じて赤き心を述しと言ふ其歌ハかの喜遊の詠歌と一字も違ふ事あらねど全く同吟なるべからず又ハ附會の説なるかいかゞ確證を知らねども聞にこれを記せしなり今の開化に比ぶれば頗る頑固に似たれども喜遊が死して恥を厭ふハ又是娼妓に稀らしき倭魂ひなりと言ふべし

春雨文庫上之終

010190509422